三[illegible]

赤[illegible]

911.3
サ
(赤冊子)

あかさうし

師の風雅に万代不易有一時乃変化あり　この二つに究り
其本一也　その一といふハ風雅の誠也　不易を知らされハ実に知れる
にあらす　不易といふハ新古によらす変化流行にもかゝはらす
誠によく立たる姿也　代々の歌人乃歌を見るに代々その変
化あり　又新古にもわたらす今見る所むかし見しにかはらす
あはれなる歌多し　是先不易と心得へし　また千変万化
するものハ自然の理なり　変化にうつらされハ風あらたまらす
是に押移らすと云ハ一端の流行に口質時を得たる計にて
その誠をせめさるゆゑ也　せめす心をこらさるものゝ誠乃変

化を知ると云ものなし唯人にはやりてものゝこせる
ものゝその沈に足をとゞめかゝく一歩自然すを知らぬ者
いく千変万化するとも誹の変化を諸師乃俳諧之加ミ
ミも古人の涎となるのみなるゝれハ時乃押移りぬくおあった
ある句落かくれともしらず云聖師末流の抗手門人誹諧乃風
雅とをよふ師の句此きのとて出て百変百化を志す者とも
抄つつ流意句の三ッをも取まもその三ッの中にいまに一二
をもみ見とゝ生たつわくのたゝ学んれは俳諧いまゝ依に
述とかれとも云もてられし気なし之高くあつうとさと
写て俗を悔るへしとの教なり是は風雅の誹をせ然き

とまて今ある処俳諧は悔へしとなる之是風雅はいつまの
八思ふ心乃色おもかりて句姿定るものなれハ元相自然
なし千子細なし心乃いろうるハしかうされハ句に詞を
学くむ是多学は誹を勤るも心乃俗之誹を勤るとふる風
雅は古人の心を採るとく八師の心よく知へしそれ心を
志つけ移ハたるに誹の道おしそれ心を知る八師の流字
の詞を追ひよく見知て其衆心の節押直し変る気て自
得するやうにせめる事を議を勤るとハ云へし師のおり節
は我心をひとつになさしめして私ことは師北乃とよろこひ
て我の門をもりとこのうは心して私の名をとも隼あ争

門人よく己を押直すへき示之松の事ハ松に習へ竹の事ハ
竹に習へと師の詞のありしも私意をはなれよといふ事也
この習へといふ示をおのかままにとりて終に習はさる也習へと
云ハ物に入てその微の顕て情感るや句となる示也たとへ
物あらハに云出ても其ものより自然に出る情にあらされハ
物と我二ツになりて其情誠にいたらす私意のなす作意也
惟師の心をよくしらされハその心の事心の句ひとなり
称之詮義せられハ採るに又私意ありをんミ穿鑿せむ
ることの八忠らしくも私意に落ておはりたかこくれせんミ穿
情くまへし其をきるのかきして君を比らしらへと云風友の中

の名目とす功者に病あり師此詞にも俳諧ハ三尺の童にさ
せよ初心の句こそたのもしけれなとゝたひたひいひ出られしも
皆功者此病を示されし也実に入るに氣をきほふとこ所あり
氣先をころせハ句氣にのらす先師も俳諧ハ氣に乗せてすへ
しとあり相槌あしく拍子をそこなふともいへり案をそこなひ
ひこ流をもとむる又ある時ハ家の氣をたはめて句をとるよし
こともいへり氣をきらし生て書の翁之門人功者にも句
てたく能句せんと私意を立て分別門に口を開く事し
其外に又おのか氣を志して心のおろかなる所也多年
俳諧好る人より外藝に達したる人をよく俳諧に

入ても師の云るよしある俳書にもこれ有師のいはく
学ぶ事ハつねにあり席に臨て文台と我と間に髪をいれず
思ふ事速に云出して爰に至て迷ふ念なし文台引おろ
せバ即反故也ときびしく示されて詞もかはり或時ハ大木倒
すごとし鍔本に切込西瓜切ごとし梨子くふ口つき
三十六句皆やり句なりといろくにせめられ侍るも皆功者の
私意をはらひすてさせんとの詞也師の心をよく執心し
つねに勤てすにのそみて案じて詠たるのなかれ案ずる
をかまはて出る節あるへうし此教勤て心の位をはなく
甚しきの動くやいなやも句と成へし氣をこ詠しかる

心精せバ剣精心細くなりてハ費えかいと節の出るなり
其の如く拙してハ傳教大師の云るごとく三の丈夫心定き
云事有まし皆いきて精たるに新しき節あるへし
新しきハ俳諧の花也古きハ花なくて木立ものふりたる
心統せる亡師常に新しみやせまふも新しみの匂ひその端
と見ゆる人を悦て我も人もせめられし如くせめて流行
せざる者ハ新しみなし新しみハ常にせむる所へハ一歩自然
にすゝむ地より新たし名月に梺の霧や田の曇りと云
ハ深め不易なり花のと見へて綿留とはとしハ新しきの
師の句乾坤の変ハ風雅のたね也といへり静なるものハ不

変化ハ治めし跡ニ其のハ変之時として云へされハ云ハ添ふ止る
ところ十八見とめ時ニ守る之飛花落葉の散るも其の中ニ
して見とめ安とめされハおさまることなし其の活る物まて
消て跡なし又句作る師の詞ニおのへてるひろ空いまくらん
まゝえまる中にいひとむへし二文點句を句のかうニ根出候と
いふを語り是その境ニ入てあれさめうちうちにみて語るを
変る事之句作ニなるとまをと語る内儀つねに勤ておゐて
無き狂ハその心能いろ句をなる内をち稽勤するゆゑハなし
ちりる故有り説言まうけてまなき
評云へく添格ハ先優美にして一曲有ハ上品之又たくをちとあ

珍しき物によるハその次之中品にして多ハ地句之師の句
とあまてそのより品といさくら歌も

梅の木の花とはちえん句いなし

此句ハ本歌之面影梅の花のおゐしはしとよちしけれも此
春の儀と得てと依るを併ニして云むせる句なるへし

きのふの三十日まちりし在ら時雨

此句ハ篇好有とうに人ニきへれぬ名ゑんやえそんらを
きのふの月とあるを本歌を余情みして此作なるへし
後の月

寒水ニ星も旅寐や岩かへ

此句ハ小町か石の上ニ旅寐をすれハいとさむし苔乃衣

とゑよけるんと云心をそへての句なるへし

かきつはたなつやみ人のおやかさき

此句も浅くさき淡なくや夕月のおや定まらぬあるはをそへての句なるへし

花の上こくよみ給ひるたきさてゝも

いまこ慨流寺の志ろへよ陸りて彩流を浸せる夕まくハいと涼しけれハ

夕されやさゝくゝに涼む浴の華

此句ハ古意をあ出ましてもんをそせる作意なるへし

かきつお淡桜てあやまりよ

此句ハさせる事もおかれとも白露楼と云ふ扁文を未合せ之一つひハ布や楼つふとも一寺の江よ楼たふやうも句作る人も制さまて後江の字抜てれのよところ付て句の白露の一純ま定る水出八接天白露楼江の楼句眼なるへしと之

たゝあをゐの此月かとうた山の振さいハいとくゝく洵の跡もたとくして落ぬへきあまたくひなるす

枝さ亦さ諸ろかれ杜若か平りれ陸暮小夜中山とてからとろく

ゑに寐て後夏自慢し　茶此嬢

此句古人の詞をまゝ出よなして風情を巡きたる初ゝるる上眼ゝるん

云して待宵は月茶の燈と宵を一ツにひるに扉てと詠ふ宮
とーふ後又句に拍子をてよかりとて月さまし茶の燈と云されし

ちる花や鳥もおとろく琴の塵

其の名集の声よりて詞を用ひられし句なるへし

粽結ふ片手にはさむ額髪

此句おかしかれ新古今集撰の時先師の申さるゝ云送
られしハ独ぐちの吟も一集にハあるへきものとて送られし

此境はひつるかいくるもろくれてや

かつむ至角はつみし候て候石

此句ハ次の毛乃詞をお去ましての句なれ

鉄茶のしゝみ川ためのお云

此句のる或集ニキ角云捨ハ上聖か佛道しゝまーしおつ
出しれ吟くたる部の眺望成へし一聯二句の格と兼て
句ときとあるさもゆるへし

野あや豆を挽おろす門の酒

侘うて影すませよ侘坊の茶

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

此句とも字餘りく字餘りけ句作の味ひハその流にてうまれ
ハひとつしとかの人ハ初瀬の山おろしよとを文字餘
のすなしと云出てふくて形のかる批示を立ましても味ふへしとて

初雪にうさきの皮の髭つくれ

此句山中に子ともと遊ひてとお出あり初雪の興ある

まさる句意作者によろこひし先ハ実体之趣あるへし

当季作のされハ風雅も師走哉

此句風雅も師走と俗とひとつに云侍る先師の心ハ

人の句に荒やけてと云句あるに餘の拍子やうしと白

ふるうるくいひくたし俗之味一し

早稲の香や分入右ハ有磯海

一しほハ時雨て雲か雪は不二

此句のたちく為大王に入てふせかの淋るに其つゝにあつ

能本名ある人かゝれてはにけてくんせ川とう川そあ

あらかむと云句のたとく佳句にても其信をもちいて

其身そもその心かみをみるへし又不二の句も山の姿それ

の気ふとなくてハ実山とひとつにみへし

梅若菜まり子の宿のとろゝ汁

この句師のいさゝかたくみて云る句にあらす俳諧と云ふ

しと詠まても寄る句ハ尤くみてとくの句ハ又せんとハ云は

とく本式にかいむく人に対しての作く桃もおもと無して

まり子の宿ハといひかへして実する一節なり

二日にもぬかりハせし花の春

くの句ハ元日ひそかにいでゝあらたまりし空と出
ある此句ハ時節の田ホ執気をうかゞふをさして新句を作り
此ハ元来ハ二日ホハと云をよむことハ仕べきことにて
ハあまり字間に当りて出るくはしと之其角たひらかに
あさまの山といふもあまへる衆をあふとハ云るに森瞬
つ人ハつまくとのおちるへし

せりや芹や縁端の田井に摩し氷

このうた所のひたく切り人めかしたる句なると芸やさゝ
君ホなつかしみ恋ひわたるなるへし

其角子の一本まうし梅の春

此句をつくらせしに諸て老師梅のさまをよましに是を
の鏡にあうらに濁一本なる此梅あれそのかにまて吟
と社人の告ぐるを身句として何かにと師の心を
むかしより此所に連俳の達人多く句をとゞむる絶
梅のこゝろをまことに悦ばしく出しる風雅の心より
此まことに清き香をうるはしくやむかしぬ所と

と北風清も清し雪の花

梅こひて卯の花拝む涙かな

此句ハ其角造営此時の嘆之と此風と云く言心
をやさしく云ひ然しきに位をよく見る梅ハ円覚寺大顛和尚

造化の時の句ハその人を標はして妄は卯の花ねむとと
のらへ然はよりて思ふらと明きそのこ花は位をさえ

稲妻をよみえるやこれ紙燭哉

この句師のいろく門人この名はあやしき示とをゐるとゐ
いひてきは句之ところりその俗やし紀をいりんとえおかくれ
ともし万らさひまも思ふ示を明はへし

旅人くつの名唯ま人おし流

此句ぞ師武江は旅出の日此吃之らのいさまし紀を句乃
物りよふりもしてよそれん初しられとハ云しとえいさゐし
きらを類き示論のもしとおさまして云のつく章さして

門人は送られし之一風情あらものとこの称らしき作き
は出さ師の心のもの示を味色し

何は此師走の市ナりし烏

此句師のいろく文字れのきここは有とる事

かしこなき正月ハ梅のなさらり

この句ハかなしきほの和哀は正月に梅咲ることを
るしそ卯月形るるほとしきほの声ハと那ふらをあまりろ体之

塩鯛の歯くきも寒し奥れ棚

此句師のいろく仏ぞりそと句はなりとの自讃よたりしとさえ
其角を生て出る人初鰹といふとそらの称の人のきぬ

楽し又ハ多く猿の面白し笑の月といふハ左角之埴網の画
くきハ家老ゆく下を奥の棚とたく言ふるも自句之とい可

春立や新年ふるき米五升

此句師の口似合しやとはし先ツ文字ありに侍る之
立りつ後ハ春立やと出りて短冊ヲも掛り侍る之

もの我世分盥にあると哎衣うゆ

いさゝらハ雪見にころぶところまて

本かしの句ハ作者に似つるふ
山路来て何やら床しすみれ草
家ハみな杖に白髪の墓まいり

灌佛や皺手合する珠数乃音

此翁ふし先ハ聖分しても二字餘りと雪見ても加
いさまへんと云文字を本枯初ハ狂句本かへしのと弁て
立りをみ連葉ハ初ハ何とふく何やら床しと云家ハ云約
一家これと立灌仏も初ハ初ヘん今やと哎ヘし後ふし
之られ侍るか此翁程あるへし皆師の心のうら紀之味ふへし

猪の床にも入るやきりきりす

此の句自筆にて初ハ床ニ来て鼾に入るやきりきりす次
とへ句ありなしかへられ侍るか

草臥て宿かる比や藤の花

此句始ハおもしろやとる此やとさはなる之

風色やしとろに植し庭の秋

此句ある事此庭を見ての句之風吹さも一ふひき風色や
さも云り詠し此しても色と云字も色るやうなれ
と色といふ事に先きへしと之

こんにやくにけふハうりかつ若菜哉

其余りし先ハ蛤に似たる又文字を再化して浅こんにやく
にあたり侍るとそ

鞍つほに小坊主のるや大根引

此句師のひさく此ぎや大根引と小坊主此よく園に立りて

句作ありと彩李

六月や峰に雲おく嵐山

この句蕉翁の句之雲並嵐山といふ句作骨折なる
処とそ

川風やうす柿着たる夕涼み

此句もみのいひ柿を名にて仕たる之

雲雀鳴中の拍子や雉子の声

此句ひばりの鳴つけたる中に雉子なく鳴入りしき
といひて去宗なる味をとくんといろくして之を完

かうさけも空也の痩も寒の内

この句師のいさくらの味を云とらんと数日かくまうことを
志得るとこなりおくる句と云え侍る之

蛇くふときけハおそろし雉子の聲

此の句師のいさくうろくし先見かく雉子の蹴爪の雅ら
いふ気ま角ヶ句之蛇くふといふハ老吟之え

木のもとハ汁も鱠もさくら哉

右の句此時師のいさく芭尺の句のかゝりをおしはてる
ことを志るべし

たが聟ぞしだに餅負ふ牛の年

此句ハ西皆の句しれ宗且之此古躰に人のしらぬ所ありて

七夕や秋を定むるはじめの夜

此句夜はじめはじめ先の秋は二つとゝめておく
ものしらべ数日の後に秋のたのしめとハ察り侍る之

丈六乃かげろふ高し石の上

かげろふ手侍つれ石のうへ
此句当寺大仏乃句之人ゝも此しはせて自も弄作
まて丈六のまゝ定る之

明ぼのや白魚白きこと一寸

この句ちし先書落しと云文字あるよし委家のさす
ことといへ至

としゝや猿にきせたる猿の面

此集且師のいたく人同し処に止て同し処にとしく
歳へるを悔ていひ捨るとなん

牛部屋に蚊の声くらき残暑かな

此句蚊の声くらし秋の風と笑下之段要有無
三諸集ヶ部とあり

掛ヶ音よの川と日比出る山哉

形なくたし小形きの上の鮠か鯖

此二句ある仮去に掛ハ鉢を鮠の下にハ諸冊之元と一体の
趣きとハいえとも門人の云ハ師おとゝえられたるとゝ

ひやくと壁をふまへて昼寝哉

是も諸冊と此の門人の云ハ師の写とく

秋風のふけとも青し栗のいか

此句いか北青をおもしろくて句にまとまる之吹ともあをしと云
雨吾句とハ云して承たる也

るかくく我を絵にみる夜哉

此句よしめハ夜るかくく我を絵にみる心のおと遠きえ

金屏に松のふるひや冬籠り

此句ハ色なき山を絵書く冬籠りの様あらしと

秋風や桐に動てつたの霜

此句換うこく秋の終りや暮の露とちらしめ八雲の待る

後なりて此秋風之

団扇もてあふがん人の後むき

此句集ともうちらきをさと五文字して下の七文字後むき

ちがひつきとゑ後ハることの句盤斎の後むきされ像の賛之

窓形に昼寝の台や簟

此句例のようしやなと云かたありけれ先ハ昼寝の床乃

台やと中の七あり

一〃セよつ夜つまるゝ茶葉哉

此句ハ此卷文通にあるに侍る其後東にくだりて待侍

此の四字ほとよくまこと侍るゆゑによりてたち折しと之

旅懐

此秋ハ何で年よる雲に鳥

此句難波にての句之此日翁より亡ることを知て下の五文

字に寸之此揚をさられし之

明月や座にうつくしき顔もなし

此句湖水の名月之名月や児立並ぶ堂の縁として

又うさなへ湖名月や海にむかへバ七小町にもわらしかる

座にうつくしきといふに定まる

蘭の香や蝶の翅にたき物す

此句ハある茶店の休らひに道をまよひしてたゝきみあり
しを老翁で見知り侍る由やゝ後に語りし家女料紙持出て
句を乞ふに遊女のいたく哉ハ此家の遊女なりし哉今ハあ
るじの妻となりし侍る之此のあるじも素読をふ誹女を妻
とし甚此難波の宗因此処に住ひ居ける時まで立寄りけて句を
乞ひ請けるとの例ありし也時のまくらつひやく書きりけり
此そこ侍れハいかにも聞くてかの難波の老人の句に有る世
のありさまの俳諧の風とうふ句を引出でしてこの句を
侍るとのありて其名をもとめよとハかくいひ侍るとく老
人の例にまかせて出捨てりちの事も聞されハ聊しくて記すとも

秋かぜやしらつく …月の影

此句さし先ハ此るかゝちよせくと秋も時雨哉と句作有
いひまかりひ語ひ侍る由やいかく句作りして仕たるを
夜投の筆すさみ餘事を月の影と自筆の極みも猶書き残

魚に似ぬ長句を出よとちる探

此句の下此さらいかく妻出へ侍りて気ち和さしに
京里見初の字此位よろしきて宛て之

飲奇によきを讃て乗し風の泥

此句の風の土とそし先あり深しきといふに侍る所成
君て泥とハ聊しくてれ侍るか

人声や此道かへる秋のくれ

此みちや行人なしに秋の暮

此二句いつれかと人々にいひけり後行人なしと定りて
より所思と云題をつけて定まり

清滝や浪にちり込青松葉

此句は先に大井川浪にちりなし夏の月と有しその句を本にて
ての句なり是にまきらはしとてかへられ侍る也

旅の木に鶯あくなる梅の肉

これ句のかはりや其中にも思はれしに一言まとまりて
其はしかきつつ越ちるまて其ともしるくなとく

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

此句病中の吟にて句作り給ひけるは夢は枯野をと云る作
意いかにと云ひ侍るやと人々もいひし後此句に定る也枯尾
花にも其角かかける如き跡を追ふ夢にもせよやと云る
と笈日記に残りけれとあり

朝茶のむ僧静也菊の花

此句は季なし師の詞にも名所のみ雑の句にもあり
たし季をとりあはせ歌枕を用る十七文字にはいかにとも
こし述かたしといへることも侍るとさるまてこの句も有
徒ならば杖つき坂の句也

門人の句に元日や家中の礼ハ星月夜といふをたゞ門
松に星月夜と斗云る句之味ふへし也
問 松風に新酒を澄す山館哉といふ句を山館を夜寒に
直してより其の秋の道乃庵りに集などに入出せし時
もし先の山館成るへしと也
問 花鳥の雲に急くやいかのほりといふ句を人の云るに只今
皆かくしらく吟ゆる句になし侍れハ句おもしかくれいと云
師の曰いかれあり此句にして吉なるへしと也 吟のくすを似
十ちかりし示を宜とし此秋の事ハある事之もし此句
事小男鹿の霧初尾花いつしか君た子に成也

もその秋く吟さけられもあきれ多きくさひあらくしけるか
とたゞり
問 絞ハからくもし人玉の妻といふ句をきれハ玉の字を刑
あくりかゝく絵も無念なるりさとて結句の沙汰しる句と云
問 如しやきれ如なり時雨に笠すしてといふ句あり是ハ初五理
届之なりし直へしと後語に月といひくと云ハ宜とと之
問 村雨なり時雨旅寝を笠の端みきんといふ句あり初の句
五ミり捨をと斗吉へしと也
問 学に備へ得る物なき哉といふ句あり下の五文字師乃
手爾よく云ひ叶ふ也とこれにのゆ思のそ語りぬるの心如

十八

とゐも夜称るへしとて
日来風や麦の中行水の香といふ句あり京気なる句称へ
京色ハ大かたの物之連哥ニ京曲といひつめし一への字近くく
侍しを一代一要句ニふる色初心ものよ作成ニいましめ侍る
俳諧ハ連哥なとニハ少々旁熟る京気の句ハ嫌ひやまし也とて
然よくいましめ有之此妻風京曲貝一つとてかけるふいさ無花
の糸にといふ御しても送られ侍るとえ哥よ京曲ハ見え抜群ニ
属まし宗家何ものなくて之宿並の急而定相似の宗派の
綱代本差見抜群の哥と何る俳士ニ阿り
師の曰俳諧之連哥といふハよく付ないふ字意之数従え
乃れ侍れも発句に心のかよへさるハたゝむなし杷人のいつくし
くさりを絶てたゝひかゝる称るへしと阿る俳士之又付の事
ハ和哀万化きとえともせんなる事出侍とあひ成し京気成
之ニ究り侍るよし師のいへるともさ又ある時師の詞ニ拵も
さ也く是とえとも世上二三拵ニ色は今ふ而十二拵ニ々
尽く侍る之拵而も未尽んや此後こに究め侍る世うに人々に
留りん々ありて様ハ未留る而もいてすとてやや之侍るへき
師の曰付といふ物ハ句響併称り推量なくしく形あるはもの起
るなる之ありて通せされハ及ふく坐而ありて師の句をみてく之忿
めありましきいひて

あれくて末ハ海行野分かな
露にかしらをおもる粟の穂
蓑は羽もいつくろはぬ初しくれ
一吹風の木の葉にしつまる
此揚二ハ前後付一体の句也 露の句ハ野分ニ淋しくあれ渺
おさまりて後をいふ句なる 至静なる体を揚とハ木の葉の句
ハ前句のおもをいふ句也 揚ニつゝらし落葉を記し満て
後乃まされたしさと見せて 前句のおもむきをいふとも
〻し紀句也
寒菊の隣もありやいけ大根

冬さし籠る小窓乃蝶
此揚ハ一家の事を述て付る也 内とかの格子之蝶の字肴て結
志きくして見あるやうのて田植うと
並おしたる冬んふ彼の夕月雨
此揚各雨をふく付る句之 句ハ其彼を越る風流を句とし出たく
秋の露けむくいける屋ノ那し
萩手祢よりや萩ニ寐よりう
此揚前句の仏乃末を述て付ける句なり
菜種干ゝ遊の端や夕涼ミ
蛍おひ行あそうさいのさ那

此独吟ハ位を見定めて其もおく付る句之はお哉

さゝありの似合哉抱を書

露けしと旅寐に蚊屋を出る

古人かやうれ秋の末かし

此独吟風のさひし紀秋古人かやうの夜ある（一）と云句

と付心ハその旅寐心高く見て心をおゝく付しさる也之

おくそこも寒くて冬木の梢かな

小春よ首の動くこのむし

この独おもてう揃る日れらの虫なりわうしの貌よ容

挑のいろを見きてるをてきを付る句之

市中ハ物の匂ひや夏の月

あつしあつしと門々の声

此独匂ひや夏の月とを見込て格界を移して

見込の心を照を

いつくの春もまつうハしき田の暮

うかれて蝶乃目をさましめる

此独ちはさうハしといふ心乃句にちるらに蝶の

其趣を振はひ入くり紀を付る句之

かくや夏戸よさいる荻の声

さゝれ木よ切しぬ松むし

この揚句の位をおもひさためて句よ移しくるもなく付る道
縁の草履乃おもたる妻
石ばしにおそ比小鮎をとり分て
此句氣色を付たる一句麻衣の老の俳之うちさためると
いふよきこ
夕皃おもく負居ひしる
榔の木まもせて病に沙汰八分に病人
一句付ともに古代めしてまた白八蕎麦なとの俳諧
、淀の捲よ涅槃くる西白なよ
語らひなると門の半付

これ一句隠者の俳之お句めり乃しきに未来と申る
書新とかり
亀山やあらしの山やこの山や
見る上よ碎てかくたれいて
前句のやの字響きともに碎てそく流るる様と付
新作一句風狂人の俳之
野松よ螺の帰ばる春
歩めめ藤おうめ人と噺して
前句のまき立る春と云ひよれしるひさに物ひよ
云ひ入てうちゑく乃めん人の媚りをおく付る句ひ匠

青天に有明月の朝ぼらけ
湖水の秋の比良のはつ霜
右句は初五乃字に而段起し湖水の秋は比良の初霜
霜と清く冷しく大いに風景を寄
僧やゝ寒く寺に帰るか
猿引の猿と世を経る秋の月
右の二句は上京る輪之人の立姿を一句として世の
おもむきを付とは
これハ人と茶難を作る月夜さは
一番を帰らしに起る秋

これハ人と何に秋の更て淋しき姿を見込人一窟
を秋なくなるものとおもひえて妹なくと麻党して起
するさは別人を立て見込心を二句は前に記さく
秋萩たくさんとく生捨のく
竹の影沈しき申付く
右句は前の字の気味にせ紀麻衣衛一句は住居
その元行付て掃除めすると見込まひしき申付
の新を付る人の字ひかわり
酒よりける所あらん
又六の目を取まで入れり

气味の句之流は双六にてまちまち情ふくほまらけぬく
ここ人の気情を付さる人
そろと祝けて酒の宴中
寐ても寝れも寐て居ぬ音情
お句乃そつとくふ下に足近く宵より待る称しその
其の心酒取出しゐる上戸のおりし机情を付する句之
煤掃の尻をたゝくと出し
むつかしく人と中あしうなり
旅宿は句にうせりしか中にれませゝく父子ののゝさる
あるに之と旅宿のしくて中あしうなりきとありもあを付る之

気宣はあれに旅する小風
旅乃跡をすてかゝし 家
跡まの字ささまを何まに旅するとの旅の宿に旅事
の人を付て考ふ之
ゆりかく眺め鏡るまはの湯
摩耶が高根に雲のかゝれる
まへ句の表満とかさをかけるもの様まやうこれを杖
事て雲のかゝれるとさをかけてお句にひゐけて付する句之
歌よせ来る 村松乃声
有時のなりし烏帽子見ゆらむ

前句の心をうけて其句の匂ひに移りて付る句之

身をそへて引起されて恥しき

髪あふれたる羅の袖

前句は招許の移りを以て付る之句ハ少女の躰に取なす

牡丹ありく浪こちらく

車らしく妹に告る郭公

いとはやく付る句之

あらし風は舟をこへたる浪の音

戸ゆりまや白子苫拉

前句の心の移りをうけて気色に移し付る之

鮑乃茹は桃色に先

筆本ハまうねに生て蔵るあり

前句に言外に続る句外の心中及くまなく蔵る

筆本とあれる宿を付移也

鎌の乃七尾乃魚ハ位く銘

奥の背中ハするを見て老を見て

前句は下に位を見込けとあるへきとむ入れし大人

の躰を付る之

中くに上間にあらされハ番傍

わつ名を里は為めかね之

同し付様之

抱込て松山広き有明ず

あふ人毎に魚くさきなり

同し付之湊村なるへし地を見込その所をいはん人乃様にうひなして付所之

四五人通る僧も寒之

薪邑町の子共の稽古能

前句は通る僧に同の様にて付る之前句は住吉ひるしては奈良のあたりにハつけなし付る之

此句は上下の気は虎る

擂に杖さは宿乃煙遠ひ

前句を気遠ひ物いひたる詞と見なして付る花の字ぬかしは咄也

此唐は里なりして八歳くみ

ぬつは茶よりあの出し入

此もあまつへきなるを查にするもあく付る句なり又ひ形をに重かきはもあるへきことをいへり

隣へもおしさは嫁をつまて来て

屏風乃陰に見物は菓子盆

同し付之是九月に立体ふるもあくして付る句

しのだぶし新しあり

入逃る諏訪の涌湯の夕まぐれ

中ゝも古れたハ山卯し

あ句小はまりて付たる句之まゝ中此句を見るに

いひたる句なり

人去のゝ中よハ仏を唱ゆらん

鼠を舟をきしるおとのさき

この句そし先ハ江戸の鼠所舟きしるをとといひな

られ侍るよ前句の云ふらふ字差合て付かられ

句之曉の字骨折まる人のいたく次戸の鼠新きまる

此句ぎしも舟きしるをといひて下ハ下の七文字おかれさき

をとえたり師まて直しこつる

投の木から〜し比至かりを出

手きさ妙に住おなひとり揃ひき

此句を〜あハ住お云ふしくと形して後淋の字除かれし

桐の木高く月さゆる也

門志先てたすりて挿する面白さ

この年先師のいとくまき儀ハ門志先ての一句ヲ仮名

まへたり試る方とハ門人みと〜ハ詰泣子のひそうんれ来

しあさ葉生といふ句まよれ王老師のやふ示し非を述

さゝぬかとる夜時雨よまつ此世哉
火をともす事よ冬のはくひす
一年此仕事手数におさまりて
此説ことわるのなり此句之十余句斗作し出て中〻
世に出せられしとそ

市人よいて是うらん雪の笠
酒の戸たゝく鞭のかれ梅
我もかまへ先えう母衣を引つれて

此句三八門人杜国か句之此分三せんとくさめく出
出仕るに師の心をくみ此分三の附句とわきまへるへきなれ

鞭にて酒屋をたゝくといふものハ風狂の詩人なるへく
さもあるまし枯梅の風情にもとめ入てハ武者のかまへ此
分三あるへからすと也

歩行ならハ杖つき坂を落馬哉
角ハとかくぬ牛もあるもの

此句ハ門人土芳か句之先師此句を風に仕らる季
なし皆揃ひとをなるへしと切りおのくさるへしつけて見
侍れハ落句よのみなして季と此句をあて侍れハとも
ゆしさてもその作者て侍れハ侍る師の心味なるへし

世之事伎藝者。樹堂遂迯。
佐勢護短、固諱門、以者噫可
歎矣哉。諸歌者添亦往〻病、諸
夫人病勢則諱語、常壓心而
瞎必魘鬼。或倫溝壑、或没波濤
蛇追鬼捕。諸般苦辛。一為傍人
所喚醒諸苦、如洗。益樹堂護短
者、無未解。魘鬼未覺焉耳。斯書
也。蕉翁之遺言而、土芳係筆

記蘭更梓以于世。後爲祝融
氏所奪。今茲新刻剞劂功成焉。
其言叮嚀精詳。實可彼喚醒
病夢與獃覺者。而能洗諸苦也矣

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

享和元辛酉春再刻

大坂心齋橋筋 奈良屋長兵衛
京寺町押小路上ル 播磨屋治兵衛
同三条寺町西ヘ入 菊舎太兵衛
井筒屋庄兵衛
蕉門書林
梓 合

大短 受入 第6380號 昭36.3.14